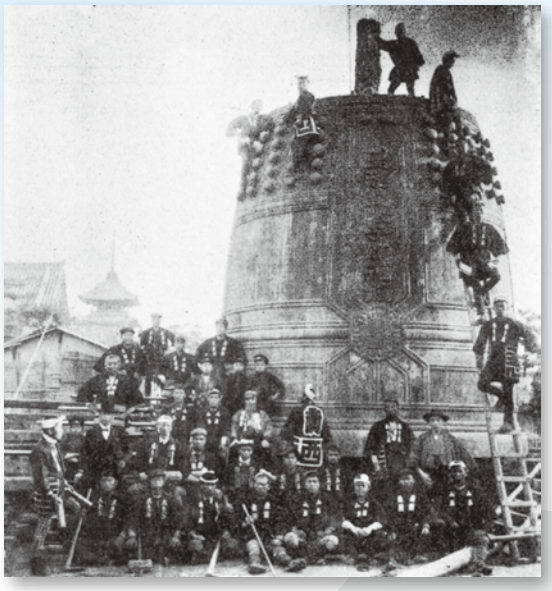
おおさか KEYわーど 第33回

釣鐘づくし音色いろいろ

―時報から煩悩払い、非行防止まで

写真：釣鐘屋敷（中央区釣鐘町）



写真：四天王寺・大釣鐘 鋳造記念写真 明治36年1月

三月はお彼岸である。大阪でお彼岸といえば四天王寺…、四天王寺といえば、愛犬の供養に四天王寺の引導鐘を撞くと、「くわーん」と犬の鳴き声のように鐘が鳴り、「ああ。無下性（むげしょう）にはどつけんもんや」で終わる落語「天王寺詣り」である。四天王寺には私も母に連れられ、先祖の名を書いた経木を鐘堂で供養してもらい、亀の井に流しによくいった。

釣鐘は大阪とゆかりが深い。鶴満寺（かくまんじ）（北区長柄東）の釣鐘は、1030年の銘のある朝鮮銅鐘で国の重要文化財だし、文化財調査で、高津（こうづ）（中央区高津）付近で鋳造された梵鐘が東京の寺院にあることに驚いた。『摂津名所図会』に高津付近の南瓦屋町の瓦職人の工房が描かれているが、瓦職人同様、型を作り、かまどの炎を操る鋳物師も付近にいたのである。

さらに鐘といえば大晦日が楽しみだ。毎年、高津宮（こうづぐう）で新年のカウントダウンを迎えるが、周囲からたくさんの除夜の鐘が鳴り響いてくる。付近は中寺町で、煩悩の数108つに掛けること、いくつの数の寺の鐘が響いているのだろう。音色も寺ごとに違う。不思議な梵鐘のハーモニーが大晦日の夜空に交錯する。

大阪ゆかりの釣鐘の話を3つしよう。まず、釣鐘屋敷を御存じだろうか。寛永11（1634）年三代将軍家光は、大坂の地子銀（じしぎん）を免除する布告をだす。その御礼に設けられたのが釣鐘屋敷（中央区釣鐘町）で、江戸時代を通じて時刻の鐘が鳴らされた。大正15（1926）年新築された大阪府庁の屋上に釣鐘は移されたが、昭和60（1985）年地元の要請から鐘は釣鐘町に戻され、ふたたび時を告げるようになる。

次が、四天王寺にあった世界最大の大釣鐘である。明治36（1903）年に開催された第五回内国勧業博覧会は日本最初の世界博でもあったが、同じときに聖徳太子1300年の御遠忌を記念して鋳造されたのが、高さ7.8メートル、直径4.8メートルの大釣鐘である。制作は、同じく高津付近にあった今村鋳造所。各種の大阪案内やチラシにも描かれ、大阪遊覧の名所となった。鐘楼も巨大で、日本画家・湯川松堂（ゆかわしょうどう）が天井画を描いている。戦争で大釣鐘は供出されたが、鐘楼は戦死者を供養する「英霊堂」として残されている。完成記念に販売されたのが、いまも四天王寺の名物「釣鐘まんじゅう」である。なお、鐘が大きすぎて実際に鳴ったのは、開眼供養と供出時の法要の二回だけとされる。「見かけは立派だが、いつも黙っている」人を揶揄するとき、大釣鐘に譬えることもあったらしい。

そして、大阪市民の誰もが知るのが《みおつくしの鐘》だ。洋式の銅鐘で、昭和30（1955）年青少年保護のため、婦人団体協議会が募金を集め、毎夜10時を告げる鐘を大阪市に寄付して旧市庁舎の塔に設置した。鐘の口径は約1.26メートル、全長約1.82メートル、重さ約825kg。 鐘には市章の澪つくしと母子像、手をつなぐ子ども達がデザインされ、次の銘文が浮彫りにされている。

「鳴りひびけ みおつくしの鐘よ／
夜の街々に あまく やさしく／"子らよ帰れ"と／
子を思う母の心をひとつに／つくりあげた 愛の この鐘」

終戦復興から10年。まだまだ社会は貧しく、非行に走ったり、厳しい生活環境に置かれていた子どもたちも多かったのだろう。浦辺粂子（うらべくめこ）や西村晃が出演した教育映画「みおつくしの鐘」が制作され、せんべい・栗おこし・ようかんなど三種類のお菓子「みおつくしの鐘」も販売された。

釣鐘とお菓子はいつの時代にも結びつきやすいものなんですね。釣鐘型のスイーツやショコラも、どこかにあるのかも…。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。